西日本新聞　2021年(令和3年)3月8日　月曜日

噴火被災の島原市千本木地区

森林の回復願い植樹

高校生が卒業記念「分身、古里に残す」

雲仙・普賢岳の噴火災害で荒廃した森林の再生に取り組む市民団体「雲仙百年の森づくりの会」は7日、島原市千本木地区で島原半島の高校生による卒業記念植樹を行った。43人が犠牲になった1991年6月3日の大火砕流から今年は30年の節目を迎えることから一般市民も参加した。

同地区では火砕流などで森林約2600㌶が焼失し、同会や国土交通省雲仙復興事務所が1998年に植樹を開始。千本木砂防堰堤そばに「卒業の森」を設け、これまでに約4㌶に約3万2800本を植えた。

23回目の今年は、新型コロナウイルスの感染予防で高校3年生が集う植樹を見送り、希望者のみの参加とした。開会式で同会の宮本秀利会長(71)が「自分の分身を古里に残し、頑張る励みにしてほしい」とあいさつ。高校生を中心に市民ら約80人が、高さ約3㍍の桜15本とツバキやクヌギなど6種類の苗木約500本を丁寧に植えた。

県立農業大学校に進むという島原農高3年の本村瑞希さん(18)は「思い出に残る植樹。大きく立派に育って」と話した。

(真弓一夫)

森林の再生を願い桜を植える高校生たち。左奥は雲仙・普賢岳